
ザレゴトボックス 戯言遣いと天才少女

零崎零王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザレゴトボックス 戯言遣いと天才少女

【Nコード】

N4101U

【作者名】

零崎零王

【あらすじ】

西尾維新さんの戯言シリーズ、めだかボックス、クロスオーバー作品です。

駄文だとは思いますがどうぞよろしくお願いします。

この小説には独自解釈があります。

第1箱 終わりの始まり（前書き）

もし戯言使いが異常者だったらそんな感じで書きました
よろしくお願いします

第1箱 終わりの始まり

いきなりこんな始まり方で悪いけど今ぼくは病院にいるんだ。言ってもぼくは怪我

をした訳でも病気って訳でもない。じゃなんでこんな所にいるのか
というと

異常をもつ子供が集まる場所らしい周りがいうからそうなんだろう
ね。

自分じゃ分からないけど、自分で悲しくなってきたよ。

まあ呼ばれるまで何処に座ってようかな？ちよつどいいところに椅子
があれ？

誰がいる

まあいいか

それにしても暇だなー

エイトクイーンでもやるかエイトクイーンのルールは、単純にして
明快である。

チェス盤の上に八つのクイーンを配置する。どのクイーンも他のク
イーンに取れない

ようにする。いわゆる頭の体操

シンプルな物は何回やっても面白いと思う飽きるけど

そんなことを考えながらも五つ目のクイーンの配置が終わり六つ目
のクイーン

はどうしようかと悩んでいたら急に横から話しかけられた。

「おい。聞いてのかよ」

チエス盤はひっくり返った

「おい。聞いてのかよ」

無視続けるのも悪いので反応だけはしてみる

「なにか用？」

「いやここであつたのも何かの縁だろ友達になつてくれねーか？」

「いいよ。断る理由もないからね」

「ありがとなお前いい奴だなそれよりなんか怒ってねーか」

「いや別にただ急に大きな声を出すとか、病院では静かにしろとか、チエス盤は

もつと大事にしるとか、そんな事全然気にしてないさ」

最後のは関係なかったけどね。

「いや怒ってるよな？悪かったとは思うけどよ」

「そういえば君名前は？」

「あたしの名前は志布志飛沫ってんだあんたの名前は」

「ばくのこといーちゃんて構わないよ飛沫ちゃん」

「それ名前か？」

「ちがうけど」

「変わってるなお前まあいいやよろしくないーちゃん」

第1箱 終わりの始まり（後書き）

みなさんこんにちは作者の零崎零王です

どうだったでしょう短いからどんな小説か分からないかな？

この続きを読みたいと思った方は感想ください一人でも読みたい人がいれば書きます

いや書かせてください

第2箱 志布志飛沫の悩み（前書き）

感謝くれた方ありがとうございます。これを励みに頑張ります。
あとがきにアンケートがあります。
それではどうぞ

第2箱 志布志飛沫の悩み

side 志布志

あたしの人生は幸せだった。家族がいて、友達がいて、あたしはどこにでもいる普通の女の子だった。こんな普通の日々が、続けば良いと思っていた。でもそう長くは続かなかった。

「志布志ちゃん朝よ起きて」
「後5分」
「いいから早く起きなさい」
「はい」
「おはよう志布志」
「おはよう父さん」
「女の子なんだから言葉遣い直しなさい」
「いいだろ別に」
「まあいいだろまだ子供だし」
「あなたはこの子に甘すぎます」
「大丈夫だよな志布志？」
「はい」
「まあいいです朝ごはんにしましょ」

「いただきます」

いつも通りの朝だと思ってた。でもそれはなんの前ぶれもなくやってきた。

急に二人が血だらけになって倒れた何が起きたのか分からなかった。

「お母さん？お父さん？」

私はすぐに救急車を呼んだ。呼べたのか正直分らない、気づいたら二人は救急車に

運ばれて病院に行っていた。

私はただ泣いていた。何でこんな事になったのか分からなかった。

あたしが何をした？

この日を境に仲のよかった友達も、家族からも、見放されあたしはこっ呼ばれるようになった。

「化物」

ある日突然家に黒服の人がやってきてこう言った。

「我々の研究に協力してもらいたい」

すると両親はこう言った。「好きにしてください」

あたしは、二人にとってもうなんでもないものになっていた。だからあたしはあの時と同じようにしてやった。

「ごめんなさい、もう二度としません、許してください」

黒服の人が、何処かに電話してるみたいだけど、あたしには関係ない。

あたしは不幸になったんだ。だから人を不幸にしてもいいんだ。

今になって後悔していた。遅すぎる事は分かっていた。

もしこの研究であたしの異常が直ればまたやり直せると思っていたのに、

あたしは、自分の異常が怖くなった。いつか人殺すかもしれない、もしかしたら

このままずっと一人かもしれない。そう考えると余計に怖くなった。だから誰かと話をしたかった。誰かに悩みを聞いてほしかった。気がつくにあたしは話かけていた。

「ねえあたしと友達になってくれない？」

返事がない。無視されたと分かったらなんかいらついてきた。

「おい。聞いているのかよ」

また無視された。

「おい。聞いているのかよ」

バットで殴ってやろうと考えてたらやつと返事がきた。

「なにか用？」

それこそ今気づいたような声だった。

「いやここであつたのも何かの縁だろ友達になつてくれねーか？」

最初は、ただ話をしたかつたからはなしかけた。ただそれだけだった。

「いいよ。断る理由もないからね」

「ありがとなお前いい奴だなそれよりなんか怒つてねーか」

ありがとうか……あたしもまだ、人間なんだな……

「いや別にただ急に大きな声を出すとか、病院では静かにしろとか、チエス盤は

もつと大事にしるとか、そんな事全然気にしてないさ」

チエス盤ってなんの事だ？

「いや怒ってるよな？悪かったとは思うけどよ」

「そついえば君名前は？」

「あたしの名前は志布志飛沫ってんだあんたの名前は」

「ばくのこといーちゃんて構わないよ飛沫ちゃん」

「それ名前か？」

「ちがうけど」

「変わってるなお前まあいいやよろしくないーちゃん」

そうだコイツにはなしててみよう。よく分からないけど、コイツならどうにかしてくれる
そんな気がした。

「なあいーちゃん」

「何？飛沫ちゃん」

「いーちゃんの異常って何だ？」

「わかんないなんだろうね？」

「自分の事なのか？」

「自分の事だからだよ」

「あたしはさ自分の異常が怖いんだ自分じゃどうしようもないんだ」

「そうなんだ飛沫ちゃん変わろうと思ってる内は変わるよ」

「知ったような口利くなよあたしの気持ちなんて分かる訳ないだろ」

「当たり前だる僕は君じゃなんだから」

話なんかするんじゃないかった。いや、会ったばかりの奴に何言ってるんだろな、あたし

「あー…志布志ちゃん？」

「なんだよ？」

なんで泣きそうになってんだあたし、友達に嫌われたからか？

「握手しない？」

「なんでだよ？」

「いいからいいから」

そう言いながらあたしの手をとる

「ねえ飛沫ちゃんの異常を今やってみせてよ」

「何言ってるんだよ？そんなことしたらお前怪我するぞ」

「いいからさ早く」

「どうなっても知らないからな」

「……………」

「……………」

「飛沫ちゃん早くしてくれる？」

「お前何した？」

あたしの異常が使えなくなっていた。自分じゃどうにもできなかったのに

「何もしてないよ握手はしたけど」

「握手したくらいであたしの異常が無くなる訳ないだろ」

「いやでもほら変わったよ、よかったね飛沫ちゃん」

笑顔でそう言うてきた。そのときのいーちゃんは、すごくかっこよくみえた。

あたしはこのとき思った。これが恋だとあたしはこいつが好きなんだと

こいつと友達になって良かったと

「よろしくないーちゃん」

s i d e 志布志
e n d

第2箱 志布志飛沫の悩み（後書き）

ここまで読んでくれた方ありがとうございます。少しはマシになったかな？

主人公をチート化するのはありですか？

このアンケートの結果は3話後ぐらいに発表します

質問、感想、要望などあれば作者まで

第3箱 江迎怒江の出会い（前書き）

球磨川との絡みがうまく書けませんでした。すいません江迎ファンの方

もっとすいません。

それではどうぞ

第3箱 江迎怒江の出会い

彼女と握手をしてから、会話がなくなった。正直気まずい。いきなりあんな事したのは悪かったとは思うけど、まさかこんな事になるとは話しかけても俯いたまま赤くなってる、どうしようかね。

「あーその…ありがとないーちゃん」

まだ赤くなっただまだし嫌われたかな？

「いやぼくは何もしてないよ飛沫ちゃんが変わっただけさ」

「いや…でも…その…」

「志布志飛沫ちゃん五番検査室に入ってくれるー？」

「呼ばれてるよ飛沫ちゃん早く行ったら？」

「また会えるよな？」

「きつとまた会えるよまたね」

そう言うとな彼女は行ってしまった。

それにしてもあれだよな。遅くない？忘れられてないよね。

それよりトイレに行きたくなってきた。

「あースッキリした」

さて帰り道はどっちだっけ？まあどうにかなるよね。

道が分からない場所で意味もなく歩くと、当然道が分からなくなる訳で

「まあこうなるよね」

そう迷子になるのである

まずい。非常にまずい。何がまずいって迷子そのものがまずい。この年で迷子って事が恥ずかしすぎる。

どうしようかな？どうやって戻ろっ？そんな事を考えていたら人にぶつかってしまった。

「キャッ」

「ごめんね考えて事をしてたから前をみてなかったよ大丈夫？」
そう言ってぼくは手を差し出す

「ごめんね怪我はない？」

「ハハハハダダダイジョウブデス」

「本当に？」

「はい」

「ならいいけど本当にごめんね」

なんかまた赤くなってるし女の子に嫌われる異常でもあるのかな？
そんな戯言めいたことを考えていたら、いや間違いなく戯言だ。

「名前教えてくれますか？」

「いいよ君の名前は？」

「わたしの名前は江迎怒江です」

「ぼくの事はいーちゃんとかまわないよ江迎ちゃん」

「悪いんだけど江迎ちゃん第五検査室の場所って分かるかな？」

「あのもしよかったら案内しましょうか？」

わたしの人生は不幸だった。

みんなわたしのことをいないみたいに扱う
だから言ってみた

「わたしが触ると、可愛いわんちゃんを撫でてても
可愛い猫ちゃんを撫でてもみんな腐って死んじゃう」

「いいわけないでしょあなたみたいな子を幸せにするために
私は心療外科医をやっているんだから」

わたしの周りにそんなことを言ってくれる人はいなかった。

でもわたしはその言葉を、信じる事ができなかった。

そんな時あの人と会ったのはわたしにとって初めての幸福だった。

「ごめんね考えて事をしてたから前をみてなかったよ大丈夫？」

そう言っただけは、あたしの手を取ってくれた。

あたしにとって誰かに手を取ってもらったのは、初めての事だった。
優しい言葉をかけてくれた先生よりもこの人の方が信じれる

そんな気がした。

「ごめんね怪我はない？」

「ハハハハダダダイジョウブデス」

「本当に？」

「ならいいけど本当にごめんね」

恥ずかしい所を見られてしまった。そう思うと顔が赤くなっていく
のが、

自分でも分かる。

わたしは少しでもこの人の事が知りたくて

「名前教えてくれますか？」

勇気を出して聞いてみた。

「いいよ君の名前は？」

「わたしの名前は江迎怒江です」

「ぼくの事はいーちゃんとかまわないよ江迎ちゃん」

「悪いんだけど江迎ちゃん第五検査室の場所って分かるかな？」

私は彼と少しでも一緒にいたくて

「あのもしよかったら案内しましょうか？」

気づけばそんな事を言っていた。

でも何でわたしの異常が平気だったんだろう？

「自分が幸せになっていいか？」

「はいそうなんです。わたし自分の異常のせいで幸せになれない気がして」

「そうだな…幸せになっちゃいけない人間はいないと思うよ
幸せになれない人間はいると思うけど、戯言だけだね。」

「そうですねわたしは幸せになってもいいんですよね」

彼女はとても嬉しそうだった。

「あっもう着きました此処です」

「ありがとう江迎ちゃん」

「はいまた会えますよね？」

「もちろんまたね江迎ちゃん」

「はい」

その時の彼女は本当に笑っているようにみえた。

『いやーすごいねきみ二人の女の子を救うなんてまさにヒーローだよ』

「誰？」

『あつごめんね僕はくまがわみそぎっていうんだよろしくね』

『人間は無意味に生まれて、無関係に生きて、無関係に死ぬに決まっているのにさ』

きみもそう思うだろ？』

「戯言だろ」

『そうかもねでも僕は思うだよね世界に目標なんてなくて、人生に目的なんて』

ないって』

「……………」

『きみとはまた会っ気がするよまたね』

なんだったんだ？

それにしてもあれだよね本当に何時になったら呼ばれるんだろうね？

第3箱 江迎怒江の出会い（後書き）

最近感想の返信に統一がない気がする。何を書けばいいのかわからない

めざせお気に入り10人

質問、感想、要望などあれば作者まで

第4箱 はじめまして（前書き）

みなさん遅くなってしまう申し訳ありません。今週は本当に忙しかつたんです。

アンケートの事忘れられたのかな？一応チートにします。

みなさんにアンケートです

ふりがなをふったほうがいいですか？本気と書いてマジと読むみたいな

それといーちゃんの設定ってあったほうがいいですか？

あとがきに出たキャラの説明あったほうがいいですか？

それではどうぞ

第4箱 はじめまして

side 人吉

診療外科医という仕事が好きだったし、それ以上に誇りも持っていた。

もちろんフラスコ計画の暗部は、知っていたけれど

それでも私が計画を主導する『彼ら』に協力し続けたのは、異常と呼ばれる

子供達を少しでも社会に、馴染ませてあげたかったからだ。

私自身と呼ばれながら育った子供だったから

おこがましいけれど

それが自分の使命なんだと思っていた。

「人吉先生ーそろそろ午後の診察を始めていただいてよろしいでしょうか？」

「あ うんお待たせ」

「もう準備できてるからいつでも」

「!？」

「えつと球磨川楔くんがいいんだよね？」

「……はい」

「大丈夫！緊張しないで別に怖くないからさ 私はきみの担当医になる

人吉瞳！よろしくね！」

「……………」

「よろしく願いしますところで人吉先生最初にひとつお願いがあ

るんですけど』

「ん？なにかな？なんでも言つてよ球磨川くん」

『僕の症状は異常なしって診断してもらえませんか？お父さんとお母さんに』

心配かけたくないんですよ』

「それは無理よあなたは明らかに異常うつんそれ以上のそれ以下の何かよ」

『あなたは異常者の研究ができればいいんでしょう？じゃあ取引しましょうよ』

人吉先生』

『まだこの病院で検査を受けていない異常者二千人のデータですこれを』

差し上げますから僕のことは見逃してください』

「あなた！そんなものどうやって集め……………」

『方法なんていいでしょう？重要なのはこのデータを運用すればあなたの研究は』

飛躍的に進歩するということです』

「もっと駄目よ！そんな賄賂じみた取引には応じられないご両親にはありのまま

報告させてもらっわ」

「私には診療外科医としての誇りがあるしあなたのような子供を幸

せにして

あげる使命があるもの！」

『託児室にいるあの子って人吉先生のお子さんですかあ？僕って寂しがり屋だし

見知らぬ病院で一人きりなんて不安で怖いからもしも入院したら彼に友達に

なってもらおうかなー』

！？

「なによそれ脅迫？賄賂と同時に脅迫って…一丁前にアメとムチのつもり？」

『いえいえ両方ムチです』

『僕を見逃せばあなたは賄賂を受け取った医者になり僕を見逃さなければ

あなたは実の息子を見捨てた使命なき医者になるまあどちらにしても

あなたの生き方はここを境に折れ曲がりますから』

もう診療外科医は辞めようせめて最後の子を診てから終わりにしよう

「●○○●くん第五検査室に入ってくれるー?」
やっと呼ばれたよ。早く終わらせようこんな所いるだけ無駄だ。

「●○○●くんでいいんだよね?」
「はい」

「大丈夫!緊張しないで別に怖くないからさ 私ほきみの担当医になる」

人吉瞳!よろしくね!」

「よろしく願います先生」

どうみても普通の子よね問題ないかな?

「うん退院してもいいよ●○○くん」

「そうですかありがとうございます先生」

「がんばってね」

「はいそつだ先生ひとついいですか?」

「なになな?」

「あなたは間違っていますよ先生ありがとうございます」

!?

最後のは余計だったかな？まあいいか

「なんでこうなるのさ」

「どうしたの？」

「なんでもないよ」

そうあれから帰ろうとしたら、迷子の子供を見つけた。ぼくも子供
だけ

看護師さんに託児室の場所を聞いて、ぼくは帰ろうとしたら

「行かないでよ」

そんなこと言われたら断りにくいよね。

そんな訳で

「何して遊ぶ？」

「なんでもいいよ」

今度はいつに帰れるかな？

side???

人間は無価値に生まれて、無関係に生きて、無価値に死ぬ
その事が頭から離れなかった。それ以上に正しい答えがあるとは思

えなかった。

母の死も、みんなの挫折も、私のせいじゃないそう考えると心が安らいでとても楽になった。

だから毎日のように続く検査に嫌気が差して、その日私は逃げ出した。

思ったより大ごとになってしまった。外に逃げるのは無理そうだと、ひとまず逃げ込んだ先は託児室だった。

病院に勤める医者や、看護師が、勤務中に幼子を預ける部屋である。幸いタイミングがよかったようで、部屋の中には先客が二人いるだけだった。

ほとぼりが冷めるまでここで身を隠そうと、私は先客に挨拶する事にした。

振り返ってみるとそれは、子供の玩具を奪っただけで、その時の私が二歳だった

ことを差し引いても、褒められた行為ではなかったけど当時の私にとって挨拶とは、

自らの『異常』を見せることほかなかったのだ。

「すごいすごいすごい！きみはすごい！すごいや」

「すごくなんてないそれにすごくたって何にもならない」

「えー？そっかなー？」

「そんな事ないと思うけど」

「だったら私に教えるがよい私は一体何のために生まれてきた？」

「会ったばかりの僕を（彼）をこんな嬉しい気持ちにしてくれた（あげた）んだ」

「「きつと君はみんなを幸せにするために生まれてきたんだよ」「

そう言われて私の何かが変わった気がした。

「じゃもう僕は行くね」

「待て貴様名はなんという？」

「ぼく？そうだなもしぼくの家が分かったら教えてあげるよ」

「そつかなら約束だぞ」

いやー今日は長かったね

「ただいまー」

「おかえりーいーちゃん会いたかったぜー」

「友今日は起きてたんだな」

「そうだよー僕様ちゃんは規則正しい生活してるんだよ」

その生活が昼夜が逆転してる事に気づいてないのかな？でもそんなところも

かわいーいぜあれ？なんでのろけ話に？

「4人？いや5人だ」

「なにが？」

「いーちゃんが会った女の数」

エスパーなのか大人も数にはいつてるし

「だめだよーちゃん浮気はキスまでならいいけど」

いやそれはもうアウトなのでは？まあ本人が言ってるからいいんだ
ろけど

第4箱 はじめまして（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
要望にあつたので長くしてみました。なっていないかも
質問、感想、要望などあれば作者まで
これからもよろしく願います。

第5箱 久しぶりだね（前書き）

アンケートに関する感想がないんです。アンケートやめようかな？
自分の思った通りにやったほうがいいのかな？
今回かなりグダグダです。
それではどうぞ

第5箱 久しぶりだね

「さあ行くぞ」

冗談でも言つて良い事と、悪い事があるよね。戯言だけど

「だめだよめだかちゃん勝手に入ったりしたら」

そっついながらも君も入ってるよね。止めてはくれないんだ。

いつもの朝だったはずなのに、なんでこんな事になったのか順を追つて説明しよう

「起きます」

そう呟いてぼくはゆつくりと体を起こす

布団だけがある状態、天井が高いだけあつて囚人になった気分だ。

もつとも囚人になった事はないので、そんな気がするただそれだけ部屋を出て下に行く

今日は珍しくあの人がいた。と言つてもぼくの父親なんだけれど。

「よおいーたんおはよう」

「おはようございます珍しいですねこんな時間にいるなんて」

「おいおいそれが父親にするあいさつか？」

「今度は何やってたんですか？」

「放射能の無力化をしろって言われたんだけどよそんな事したら世界が終わるからよ」

逃げてきた」

なんとも笑えない話だった。

「そんな事よりお姫様は寝かさなくていいのかよ」

「そんなんじゃないですよ」

「そうかよまあ頑張れ王子様」

「友入るぞー」

返事がない

意外な事に友は寝ていた。

さて、これからどうしたものだろうかと考えながら、ぼくはベットの脇にそっと座って

友の寝顔を堪能する。

と、友が寝返りを打った。

そしてうつすらとまぶたを開く。

「……………？ あれ……………いーちゃん？」

ぼくの気配を敏感に感じ取ったのかどうなのか、友は目を覚ましたようだった。

ハワイアンブルーの髪をくしゃくしゃと掻き分けながら、まどろんだ目でもくを見る

「ああ……………うーん……………いーちゃん……………えっと……………起こしにきてくれたんだねさんくー」

「いや寝かしに来ただけだね。それとも今寝たところなのか？」

だったら悪いことをした。

ううんと友は小さく首を振る。

「三時間くらい寝たはずだよ昨日はいやなことがあってさ僕様ちゃん不貞寝

しちゃったんだ。さてといーちゃん」

「なんだ？友」

「ちよつとじつとしててね」

ぼくに戸惑う暇すら与えずに友はぼくに抱きついてきた。

それはしなだれかかってきたと表現した方が正確なくらい、完全にぼくに体重

を任せていた。友の小さな頭がぼくの肩に載る体が密着して、友の細い腕が

ぼくの首に回る。

ぎゅ。

重さを感じない思いは感じるけど。

「あの……玖渚さん？」

おもわず敬語になるぼくだった。

「じゅーでーんちゅう」

充電中らしかった。と言うかぼくはコンセントが何かなのか？

玖渚友はマイペースなのだ

「うん……ありがとう」

そう言っ**て**ぼくから離れた

「充電完了なんだよ今日も一日頑張ろうね」

そのまま友は部屋にあるパソコンの方に向かって行った。

さてと、下に戻る。

「ずいぶん遅かったじゃねーかなんかあったのか」

「なんにもないですよ」

そんなに時間は経っていないと思っていたらもう昼だった。

「俺はもう戻るから後は適当にやっつけ」

「逃げてきたんじゃないかなかったですか？」

「バーカやる事はいくらでもあんだよ」

ピンポン

こんな時間に誰だろ？この家に誰かが来るなんて

「はい今出ます」

ガチャ

「約束通り来てやったぞ」

ボタン

あれだこれは夢だ。

だってそうだろ一回しか会ったことない人間の家がなんでわかるんだ？

考えてもしようがない

ガチャ

「えーつと久しぶりだね」

そういえば名前聞いてなかったな。

「さあ約束通り名前を教えてもらっぞ」

本当にそれだけのために来たんだ。

「家に入ろうよ」

「じゃまするぞ」

「おじゃましまーす」

「でぼくの名前だっけ」

「そうだ」

「ぼくの事はいーちゃんで構わないよえっと……」

「私は黒神めだかだよろしく」

「僕は人吉善吉だよろしくねー」

「そうだめだかちゃんの家で遊ぼうよ」

「それはいい考えだな」

とまあそういう訳でめだかちゃんの家に行くことになったんだよね。
「めだかちゃんの家に行くのは分かったけど後で行くからさ地図と
かない？」

「なぜだ？このまま一緒に行けばいいだろう？」

「ほらぼくも準備とかあるからすぐ行くからさ」

「そうかならしかたないな待っているからな」

そう言うためだかちゃんの家までの地図を書いてくれた

「また後でねー」

ボタン

やっと思ってくれたよ

でも行かない訳にもいかないよね。

早く行かないとめだかちゃんに悪いからね。

あれ？女の子が車に轢かれそうになってる。

今日は厄日だよホントでも助けない訳にもいかない

「えっと大丈夫？」

「はい」

「ならばくは行くよ」

side???

私の人生は普通だった。

普通の友達、普通の家族、そんな普通の人生を送ってきた私だからこそこう思う

世界って普通のことしか起こらないんだ。

正義のヒーローなんていないし、悪の秘密結社も存在しない、なにもかも普通

自分は普通の事しかできなくて普通に死ぬ

そして今日も普通に終わると思った。でも少し違った普通に変わりないけど

車に轢かれて死ぬこれで私の人生は終わると思っていた。

急に人が飛び出してきた。すると車が彼を避けるように走っていた。

「えつと大丈夫？」

彼はそう聞いてきた。

「はい」

「ならばくは行くよ」

私は普通である事をやめようと思った。そうすれば普通じゃない彼にまた会える

そんな気がするから。

side??end

「やっと来たか遅いぞ」

「ごめんね少し迷っちゃって」

それからぼくはヒューストンに行くまでの三年間めだかちゃん、善吉くんと遊んだ。

第5箱 久しぶりだね（後書き）

アンケートは三つです。

1 振り仮名を振った方がいいか？本気と書いてマジと読みたいな

2 いーちゃんの設定を書いた方がいいか？

3 出たキャラの説明をあとがきに書いた方がいいか？

協力お願いします。

質問、感想、要望などあれば作者まで

第6箱 ER3システムそして赤い…… (前書き)

今回は説明が多くなってしまいました。すみません

あとがきに説明を書くと言いましたがネタばれが多くなるのでまだ書きません。

今回から独自解釈が多くなります。

それではどうぞ

第6箱 ER3システムそして赤い……

ぼくの父親は天才だった。ぼくが言うのもなんだが本当に何でもできた。

経済学、歴史学、政治学、文化学、物理学、高等数学、生物化学、電子科学、

およそ学問、およそ研究、と名のつくもの手をだしていた。

熱くなりやすく冷めやすい。そんな性格だったからこそできたのか
もしれない。

ある時は

「よおいーたん今日は音の研究をしてんだよ言葉で色々できるかも
な」

またある時は

「よおいーたん今日は毒の研究をしてんだよこれは視覚毒っていつ
て光で毒に
するんだよ」

またまたある時は

「よおいーたん時代劇を見て刀を作ろうと思ってな 炎刀銃 銃な
のに刀

面白くねーか？」

何でもできる父親に聞いてみた。あなたに不可能な事はあるかとす
ると笑いながらこう言った。

「不可能？そんなもんこの世にはねーよあるのは可能かそれ以前の
問題か

ただそれだけだよ」
当時のぼくには理解できなかった。もつとも今でも理解はできない
んだけど

何でいまさらこんなこと……戯言だ

ER3システムでの生活もようやく2年が経とうとしていた。

アメリカはテキサス州のヒューストンに、ER3システムという研究機関がある。

ついた二つ名が 大統合全一学研究所

何よりも学習する事が、どれよりも研究する事が大好きという二つの意味で頭の

切れた連中の集合体。三大欲求より知識欲が強いという非人間の巣窟。

完全な非営利組織であり、知識や研究結果を売るような真似はしない。

ある意味では内向的で閉鎖的な、一種の機密機関と言っている。
基本的なルールは四つだけ。

プライドを持たない

節操を持たない

愛着を持たない

弱音を吐かない

互いにありとあらゆる協力を惜しまず、森羅万象有象無象と何でも

やり、無駄なこと

は世界が滅びようとも絶対しないし、宇宙が破綻しても途中で手を引くような

不細工はしない。

研究がしたい、とにかく何でも知りたい、知らずにはいられない、という、目的と

手段が完全に一致した連中の吹き溜まり、ER3システム。

集まっているのは高名な大学の教授から研究者、素数学者まで、それこそ節操なく

ありとあらゆる種類の人間が揃っている。一部のマスコミでは勉強のし過ぎで

頭のおかしくなった連中の宗教団体と、揶揄されるくらいに異様なメンツであるらしい

しかしそれゆえに絶大な研究成果をあげている組織でもある。

個人ではなく団体として、すべてがEP3の成果である。

非営利組織であるからとあらゆる賞や名誉を断っているからだろう、いまいち派手に

なれないものの、その評判は学界では決して低くない。創立から一世紀も満たない

歴史の浅い研究所ではあるけど、そのネットワークはいまや世界中に広がっている。

そして、その研究所に七愚人と呼ばれる超越的存在がいる。

世界の解答にもっとも近い七人

と評される選ばれた者達が選んだ七人の、正に

天才の中の天才

と、まあ何でそんな所にぼくがなんているのかというと友が実家に帰った時期と

ER3システムへの案内がたまたま重なったからせつかなら行ってみようという訳だ。

もつともER3システムからの案内自体珍しいらしいけど。

友は元気だろうか？

そういえば何か言われていたような気がする。

「いーちゃん僕様ちゃんちよつとの間居なくなるけど2年後には帰ってくるからね

いなくなったらやだよいーちゃん」

気のせいかな？

「戯言遣い君テレビを見てごらん面白い物が写ってるよ」

この人は三好 心視

小学校高学年で、動物解剖学の博士号を取った天才肌の学者。関西出身で、31歳。

専門及び趣味・嗜好は解剖。

ER3システムの若き才能達を、次々と中退に追いやったことから「青田狩り」と呼ばれている。ER3システムの開発計画において重要な役割を果たしている。

そういえば、僕の呼び名がいーちゃん、いーたん、に加えて戯言遣いが追加された。

「三好さんなんですか面白い物って」

「いいから見てごらんよそれと君に女難の相が出てるよ」

「いつもの勘ですか？」

「勘だよ」

そんな事よりテレビを点けてみよう
ピッ

大変です世界中の軍事コンピューターがハッキングを受け核兵器が
発射されようとしています！！

何の冗談だこれは？

「すごいだろ世界が終わる前にやる事を終わらせるってみんなが
ばってるよ」

こんな時でもそうなのか此処の連中は、っていうか何であなたは笑
ってるんですか？

速報です！！たった今犯人からメッセージが送られてきました。

いーちゃんのいない世界なんていらないだから壊す

いーちゃんとは誰のことなんでしょうか？このまま世界は終わって
しまうのか？

速報が入り次第お伝えします。以上ニュースでした。

「どうかしたのかい戯言遣い君」

「いえなんでもないです」

これ友だよな？ぼくのせいで世界滅亡とか冗談だろ？

「ちよつと外に行つてきます」

頼むから出てくれよ

ブルル ピッ

ワンコールで出たよ

「やつほーいーちゃん久しぶりー元気だった？」

「久しぶりだねひよつとして今忙しい？」

「いや別に世界を終わらせようと思ってたけど今はいーちゃんと話

「す方が大事だよー」
「やっぱり友だったか」

「あのさ友世界滅亡はやめてくれないかな何も言わずに居なくなつたのは悪かった」

「この埋め合わせは今は無理だけど必ずするからさ」

「いーちゃんのお願いならしかたないんだよいいよ僕様ちゃんは世界よりいーちゃん

の方が大事なんだよ」

「それは世界の方を優先してくれ」

「今からまた作業にもどるからまたねいーちゃん」
ピッ

「なんとかなつたかな？捕まったりしないよね？」

「お帰り戯言遣い君なにかあつたのかい」

「なんにもないですよ」

「今日はもう寝よう」

「皮肉にもこの日のサイバーテロを境にあらゆる国の、ネットワーク技術は飛躍的な
進歩を遂げるのであつた。」

あのサイバーテロから一週間

ぼくは朝から呼び出されていた。

何でもぼくに会いに来た人がいるらしい。

ガチャ

「失礼します」

「やっと来たかふうん聞いてた通り死んだ魚みたいな目してんなお前」

サイレントに失礼な事を言われた気がする。

ぼくの前いる人は派手な服装をした女性だった。

嫌でも人目を引くワインレッドのスーツの奥に、胸の大きく開いた白いカッターが覗く。

その上に、袖を通さずにコート羽織っている。肩まで届く長さの髪は高価な整髪料

でも使っているのだろう。異様とっていいほど艶がある。

モデルか何かと思うくらいプロポーションがよく、背も高い。

その人物はこちらに向かって、来るそして何の前触れもなくその長い足を垂直に上げ

ぼくの内臓にヒットした。思わずうつ伏せに倒れた。

「ふうん本当に目を閉じないんだ」

彼女は少し関心したように言う

「格好いいなお前まあそういうわけでこんにちわ」

「哀川さん……ですか」

哀川？

哀川、哀川…

それはどこかで聞いたような名前だけれど

「さてあたしが会いに来た理由が分かるか少年」

「いえまったく」

「本当に？」

「はい」

「玖渚友」

！？

「何で知ってるんだ？って顔してるぜ少年」

顔に出ていたみたいだ

「いーや違うぜ」

心を読まないでほしい

「だからただの読唇術だって」

「サイバーテロを起こさせるほどの人間がどんなやつか見に来た」

「そうですか」

「そうですかって…まあいいやまたないーたん」

あの人はい体なんだったんだろうか？

そういえば三好さんが言っていた女難の相ってなんだったんだろうか？

第6箱 ER3システムそして赤い……

（後書き）

もう一個書こうかな？

めだかボックスと化物語のクロスオーバー

読んでみたい人がいれば感想ください。

質問、感想、要望などあれば作者まで

第7箱 やあはじめましてばく（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません。読みにくいと言われてから書き方をどうするか？

今回短いのでおまけという名の蛇足があります。

よろしければそちらもよろしく願います。

それではどうぞ

第7箱 やあはじめましてばく

ER3システムでの生活もいよいよ10年目

ばくにルームメイトができた。

彼女の名前は想影 真心 ER3システムでの担当は、戦闘科学ばかりの本名を知っている
数少ない友達。彼女曰く親友らしい。

「はぁー疲れたいーちゃんなんか飲み物ないか？」

「だからってばくの所に来なくてもいいだろ」

「いいだろ別に実験ばつかで疲れるんだよテレビでも見よ」

ピッ

ニユースです。今世紀最大の謎とされていたフェルマーの最終定理が解かれました。

しかもなんと解いたのは、中学二年の黒神めだかさんです。繰り返します……

「へえーすごいな見てみるよフェルマーの最終定理が解けたってよ」「すごいね」

前にも言ったように、此処ER3システムあくまで個人ではなく団体としてだ。

その程度のものならとつくに解けている。しかしそれは発表するだけ無駄と判断され
今日までに至る。

「そういえば今日日本から一人此処に来るらしいぜまあ俺様には関係ないけどな」

「そうだぼくは今日人と会わなきゃいけないから」

「わーっ だよ浮気だめだよーちゃん」

「友みたいな事いわないでくれよ」

[illegible]

「はあー行つてきます」

「おういってらー」

「すいません教授」

「おそいだけ待たすつもりだ？」

「あれ？あなたも来てたんですか」

「私が此処にいるのがおかしいみたいなの□ぶりだな」

彼女の名前は園山 赤音

七愚人の一人で、日本人女性学者として最も高い地位にいる。

「まあ二人とも落ち着いてくださいそれと僕は助教教授ですよ」

この人はヒューレット助教授

七愚人の一人にして、その最上位に君臨する存在。

前世紀最大にして今世紀最大最後であるだろう才能の持ち主。一桁の年齢で全ての

学問を“究め終わった”空前絶後の男。大統領並みの免罪特権が与えられており、

その頭脳は国力を挙げて保護されていると言われる。

「それでぼくを呼んだ理由は？」

「その事なんですが実は完全なる人間を創れるかどうか政府の方から言われまして

みなさんの意見を聞きたいと思ひまして」

「ちよつと待つてくださいよER3システムは個人ではなく団体のはずでしょう？」

「そうですねですけどね」

「私は無理だと思ふねこの世の中に完全なんて存在しない」

「数学者のあなたがそういうならそうかもしれないね」

「あなたはどうです？」

「ぼくですか？そうですね受け売りですけどこの世には可能とそれ以前のどちらか

だそうです」

「それにぼくはあなたがたのような考えはできませんよ」

「それじゃまるで自分はちがうみたいに聞こえるな」

「そうですね君だって僕達と同じ 七愚人 の一人じゃないですか？」

あれから結局答えはでなかった。

「やあ初めましてぼく」

「すいません何処かでお会いしましたか」

「いや初対面だよ僕の名前は安心院　なじみ親しみを込めて安心院と呼びなさい」

「えつとよろしく？安心院さん」

「人の厚意をスルーしたね君」

「すいません」

「せっかく来たけど僕にはあいそうもないねまたねぼく」

side 安心院

いや200以上生きてきたけどすごい場所だね

僕にとって人間なんてどうでもいい存在だけど彼だけは違った。

いや面白いねそうだと彼を学園に来るようにしてみよう。

楽しみだなー早くこないかな？

side 安心院 end

ここからおまけ

俺はいわゆる転生って奴をしたみたいだ。

誰かを助けて死んだわけでも、間違っただけでもない。

何時の間にか化物語の世界にいた。

しかもどういう訳か阿良々木家の子供として、養子になった。

神様に頼んだわけでもないのに、めだかボックスの異常と過負荷が使えた。

俺は普通の日々を送ってきたはずだ。なのになんでこんな事になっ
てんだ。

でももし原作に関わるなら、ファイヤーシスターズのブラコン化を
止めてやる。

原作だと、別に阿良々暦が関わらなくても助かったのもあるしそれ
どころか

関わったせいで悪化したのもあるしな。

「どうしたんだ兄貴」

「どうしたのお兄ちゃん？」

火憐と月火が心配そうにこっちを見てる。

「なんでもないよ」

俺なんかが言っても意味なんてないかもしれないが伝えておこう。

「なにがあってもずっと家族だからな」

「当たり前だろ」

「もちろんだよ」

こんな風に思ってもらえるなんてな暦が本当に羨ましいぜ
でも今は俺だけど

「兄さん」

「あーごめんお前のこと忘れてた」

「僕の扱い酷いよね？家族だよな？」

でもまあ今からどうするかなあ

第7箱 やあはじめましてばく（後書き）

次回はいーちゃんの設定と今まで出たキャラの説明を書きます。

質問、感想、要望などありましたら作者まで

おまけをちゃんとした形で読みたい方がいましたら感想ください。

第8箱 いーちゃんの設定と人物紹介（前書き）

人物紹介が長くなりそうだったので、めだかボックスの紹介は後にします。

そういえばP V 1万達成したので、記念に番外編を書こうと思います。

あとがきにアンケートがあります。ご協力よろしくお願いします。

前回読んでくれている方に誤解を与えてしまったようで、すいませんでした。

安心院さんのぼくの呼び名がぼくです。悪平等という意味ではありません。

人物紹介の細かい所は感想ください。お答えします。
それではどうぞ

第8箱 いーちゃんの設定と人物紹介

人物紹介

名前表 いいものの 井伊友野

裏 いちがいひものの 壱外人物

性別男

性格意外と女好きで惚れっぽい反面、男に淡泊。

年上が好きだが年下の娘によくモテる。

この物語の主人公にして語り部いーちゃん、いーたんなどと呼ばれている。

能力 むいしき
無為式

自分では何もしないのに周囲が勝手に狂いだす。

無闇の為にのみ絶無の為にのみ存在する公式 システム

存在するだけで迷惑な絶対方程式。萩原子荻がこう呼んだ。

能力 けっかんせいひん
欠陥製品

他人からの影響を受け付けない。（異常、過負荷、悪平等の能力）

自分から変わる事はなく、変える事もできない。

人しての欠陥が多い。他人と風景の区別がつかないなどがある。

おもかけまこころ
名前想影真心

性別女

性格天真爛漫で明るい

哀川潤に負けた後は、彼女をライバル視するようになる。

骨董アパートの面々をはじめとする色々な人から可愛がられており、本人も彼らの頼みをきいて、闇口崩子を助けにいたりと関係は良好。

《人類最終》・「橙なる種」。ERシステム時代の「ぼく」のルームメイト。

「MS-2」が、非人道的な数多くの人体実験を繰り返し、奇跡的に作り上げた、

「死色の真紅」を越える人類の最終存在。「ぼく」を本名で呼んだことのある

数少ない人物の一人でもある。意志の強そうな太い眉、挑戦的な吊り目、

輝くオレンジ色の髪と瞳、荒縄のような三つ編み、子供のような体軀、

アホ毛が外見的特徴である。一人称は「俺様」で男言葉を使う。「万能」とされており、1回見た技ならば全て使うことが可能。

ある事件で「ぼく」との再会を果たした。

ぼくの呼び名はいーちゃん

名前玖渚友
くなぎさととも

性別女

性格天真爛漫で明るい

劣性遺伝子である青い瞳と青い髪を持つ、引きこもりの美少女。サヴァン症候群。

一度覚えたことは絶対忘れない。 数少ない「ぼく」を本名で呼んだことのある人物

電子工学、情報工学、機械工学のプロフェッショナル。

ぼくの呼び名はいーちゃん

名前三好心視
みよしこうしん

性別女

斜道卿竜郎研究施設の準機関長。小学校高学年で、動物解剖学の博士号を取った

天才肌の学者。関西出身で、専門及び趣味・嗜好は解剖。

かつてER3システム計画プログラム部門で教鞭を執っており、「ぼく」がER3に在籍

していたときの恩師。ER3システムの若き才能達を次々と中退に追いやったことから

「青田狩り」と呼ばれていた。ER3システムの「MS-2」という機関で《橙なる種》の

開発計画において重要な役割を果たしており、想影真心の「真心」という名は彼女の

名に由来している。斜道研究施設崩壊後、ER3に復帰。

ぼくの呼び名は戯言遣い（モンキートーク）

名前ヒューレット助教授 本名は不明

性別男

「七愚人」の一人および「七愚人」の最上位に当る人物。一桁の年

齡で世界の全ての
学問を“究め終わった”空前絶後の男。20世紀及び、21世紀最
大の才能を誇る。
大統領並みの免罪特権が与えられており、その頭脳は国をあげて保
護されている。

「ぼく」曰く、“宇宙の仕組みそのもの”。西東天（後述）の師。

そのやまあかね
名前園山赤音

性別女

七愚人」の一人。日本人で初めて、しかも二十代の若さで七愚人に
上り詰め、日本人
女性で最も高い地位にいる。空手は全国優勝の腕前。

あいかわじゅん
名前哀川潤

性別女

《人類最強》。全ての世界を股にかける人類最強の請負人。合法・非合法問わず、お金さえ積まれれば、どんな仕事でも引き受ける。万能家。典型的主人公体質。
変装・声帯模写および声帯同化・ピッキング（その技術は指紋認証までにも及ぶ）
・読心術及び口唇術（相手の唇の動きから何を話しているか理解する術）の達人。
「人類最強の請負人」、オーバーキルドレッド「赤き征伐」など多くの異名があり、数々の武勇伝・伝説を持つ。分類上は一般人にカテゴリーされる。ハッピーエンド主義者

この作品の独自解釈は大きく分けて三つです。

一つ目は原作では死んだ人間が生きている、逆に生きているはずの人間が死んでいる

二つ目は原作の設定が少し違う。例えばいーちゃんがER3システムを中退していない

三つ目は会っていない人間がいる。例えば鹿鳴館大学のクラスメイト後は性別を決めていたりとか、いーちゃんの本名を決めていたりとかです。

第8箱 いーちゃんの設定と人物紹介（後書き）

アンケートです。番外編で書くなら？

1 いーちゃんと零崎の出会い

2 哀川潤と零崎曲識の再会

3 時間が掛かってもいいから考えてある物全部（リクエストも含む）

4 そんなことより本編

今回数字だけの感想でもいいのでよろしく願います。

質問、感想、要望などありましたら作者まで

第9箱 箱庭への誘い（前書き）

今回は書いていて楽しかったです。面白さが伝われば幸いです。

アンケートに協力してくれた方ありがとうございます。

アンケートはまだまだ募集しています。

さすがに4人だけだと少ないのでアンケート協力お願いします
それではどうぞ

第9箱 箱庭への誘い

EP3システムでの生活も終わり色々な事があった。もっともそのほとんどが

巻き込まれる形でだけど、もう起きよう。そう思って時計を見てみるともう昼だった。

その時ドアがノックされた。インターホンなんて文明の利器はこのアパートにはない

「今開けます」

「御免」

隣の部屋の住人、浅野^{あさの}みいこさん。ばくより年上の二十歳、フリーター、

和服趣味のお姉さん。サムライみたいなボニーテールが特徴的で、ちよつとミステリ系人格。

そついう所も含めて好意の持てる人だった。

「みいこさん…じゃないですか、おはようございます」

「寝てたのか？」

「ちよつと寝過ごしまして」

「さすがにこの時間にまでになると、ちよつとは言わないぞいこの字」

「すいませんみいこさん、あ、上がっていきます?」

「いや、いいこれを渡しに来ただけだから」

そついつてみいこさんは、箱をばくに渡してきた。

「あのこれは?」

「八つ橋だ、おいしいぞ、食べるといい」

「ありがとございます」

「それじゃこれで、わたしはバイトだから」

さてと、どうしよう？といってももう昼なんだけれども。そんな事を考えていたら声をかけられた。

「こんにちは、戯言遣いのお兄ちゃん」

やみくちほうこ

闇口崩子骨董アパートに兄と一緒に住んでいる家出少女。13歳。

身長138cm、体重32kg（推定）、血液型O型rh-、スリサイズは秘密、

髪をおかつぱにし、雪のように白い肌の人形のような美少女。わんこちゃん。

肉を食べないベジタリアンで煙草の煙が嫌い。趣味は下等生物の殺害。

中学生、日々図書館に通い詰めて知識を漁っている。

ある日を境に崩子ちゃんとは、主従関係を結んだ。といっても仲の良い兄弟みたいな

関係に落ち着いている

「だめだろ崩子、勝手に先に行ったりしたら、あ、こんにちはいい兄」

骨董アパートに妹と一緒に住んでいる家出少年。15歳。

バイトに明け暮れている。喫煙者。ヤバ系の地獄主義者。

「こんにちは、崩子ちゃんに萌太くん崩子ちゃんは学校帰り？萌太くんは……」

「僕はバイトの帰りです」

「あれ？学校が終わったって事は姬ちゃんは？」

「姉姉様ならもう少しで帰ってくると思います」

「師匠！大変です姫ちゃん、姫ちゃんは……」

タイミング良く彼女は帰って来た様だった。

「えっと一旦落ち着こうか姫ちゃん」

「宿題が多すぎます！！なんで勉強しないといけないんですか！！」
それが学校だよ姫ちゃん

「それはそうと昼ごはんにしません？よかったらいー兄と姫ちゃんも」

「ありがとうそうさせてもらっよう」

「さあ早く行きましよう」

「ありがとう萌太くん助かったよ」

「御粗末様でした」

その時ドアがノックされた。インターホンなんて文明の利器はこのアパートにはない

「今開けます」

「よおいーたん暇だから来てやったぜ」

「おいどうしたいーたん頭抱え込んだりして？」

まさか哀川さんがノックをするなんて

「なんか失礼な事考えてねーか？」

「おつ昼飯食べてたのかみんなも揃って」

「あたしにも何か作ってくれるか萌太くん」

「はい」

「それで何の用ですか？哀川さん」

「上の名で呼ぶな下で呼べ。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだ。つてもういいよ」

それよりお前に会いたって人がいて、つれて来たんだけど」

「へえー誰です？それ」

「確か不知火って名前だ知ってるか？」

「いえ」

「そうかそろそろ着くと思うんだけど」

「すみません潤さん。案内されたのはこちらでよろしいでしょうか？」

「おう入っていいぞー」

「いや、哀川さん自分の家じゃないでしょ」

「あの一」

「あ、すみませんこんな所ですがどうぞ」

「失礼します」

「それで何の御用でしょう？」

「その事なんですが二人でお話できないでしょうか？」

「こいつに聞けよあたしに聞くなよ」

「ぼくはいいですけど」

「そうかよじゃあたしは出て行くよ。そうだ仕事とはいえーたんを傷つけたら

許さないぜ、いーたんはあたしのお気に入りだからな」

「みんなも出て行ってくれるかな？」

「分かりました。ほら崩子も行くよ」

「師匠に従うのが弟子の役目ですからね」

「すいません騒がしくて」
「いえいえ構いませんよ」

「それで話というのは？」

「実はあなたに協力して貰いたい事があるんですよ。井伊友野さん」
「その名前をどこで？」

「まあ今はいいじゃないですか？それよりも私が協力して頂きたい
フラスコ計画に、

ついてお話があります。」

「フラスコ計画？」

「フラスコ計画は、人為的に完全な人間を創る計画です。それにしてもまだ

気づかないんですか？不知火ですよ、不知火」

不知火？

不知火、不知火…

それはどこかで聞いたような名前だけれど
思い出した。ER3システムの寄付金を毎年寄付してくれている人の
名前が確か不知火

だったはず、合ってるよな…

「今回はお話だけです、気が向いたらこちらにお越しください」

そついうと名刺をぼくに渡してきた。
「それではさようなら井伊さん」

パタン

行つたか…それにしても完全な人間を創るか…戯言だよな本当、ど
うしてぼくは
いつもこうなんだ。本当に戯言だ。

「哀川さん、みんなも出てきていいですよ」

ぼくがそついうと押入れからみんなが出てきた。

「なんだよいーたん、気づいてたのかよ」

「何やってんですか？それにみんなも」

「すいませんー兄、止められなくて」

「萌太くんは何も悪くないぞ、いーたん」

「そうですね。悪いのは全部哀川さんですもんね」

「そうだ、金やるからこれでなんか買つてこい」

「さすが潤さん太っ腹ですねさあ早く行きましょう。萌太さん、崩
子ちゃん」

「待つてよ姫ちゃん、崩子、えつとそれじゃ行つてきます。」

「おう、いい物買つてこいよ」

パタン

「さてといーたんどうなんだ？行くのか？」

「行きます」

「どうしたんだ？いーたんえらく前向きだなおい」

「なんでしようね？行かないといけない気がするんですよ」

「そつかよ」

「哀川さん頼みがあります」

「なんだよいーたん」

「みんなのこと頼みます」

「心配すんなよいーたんあたしは人類最強だぜ」

「普通自分で言いますか？」

「あたしだからな」

本当にぼくは良い友人を持った。ありがとうございます。

「哀川さん」

「何だ？」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

パタン

「死ぬなよ、いーたん」

哀川さんと別れた後ぼくは、零崎に会っていた。

「へえーそのフラスコ計画ってのに協力するんだ？」

「そうなんだよ人間失格。でも君に会うなんて不吉だよね」

「おいおい俺は黒猫かなんかなのか？」

「殺人鬼だろ」

「バーカーそんな事俺が一番知ってるっての」

「そういえばあれからどうしたんだ？」

「いやあの女に負けてからは普通に生活してたんだが妹に見つかったら今のは

逃亡中だ」

「へえー妹がいたんだ」

「そろそろ行くぜ」

「じゃ、息災で。人間失格」

「ああ。精々頑張れ、欠陥製品」

「ばいばい、セリヌンティウス」

「走れ、メロス」

ぼくは 箱庭学園 で的一幕を演じる

第9箱 箱庭への誘い（後書き）

人物紹介

名前あさの浅野みいこ

性別女

骨董アパート住人。いーちゃんの隣に住むお姉さん。22歳。

剣道家にして剣術家、サムライのようなポニーテールで甚平を普段着に、趣味は

骨董集め。タバコは吸わないが、酒はザル。挿絵の煙管は伊達煙管。面倒見が良く、あまりに良すぎて何度も失敗している。

フィアット500の持ち主ナンバーは京都20に40-14で、よくいーちゃんが足に使う為に借りている。

ぼくの呼び名はいの字

名前いしなぎもえた石皿萌太

性別男

腹違いの妹と共に住む家出兄妹の片割れ
実家は『殺し名』序列第七位の《石皿》の一族。《死神》で、水玉
模様の鎌を
持っている。何が何でも水玉かもしれない。

ぼくの呼び名はいー兄

名前やみぐちほうこ闇口崩子

性別女

腹違いの兄と共に住む家出兄妹の片割れ
三歳の色白でおかつぱ頭の良く似合う、当アパートきつての清純派
実家は『殺し名』序列第二位の《闇口》の一族。愛刀はバタフライ
ナイフ。

刃物連盟に加盟。

既にファンクラブが結成されており、その構成メンバーは非常に幅
広い。

ぼくの呼び名は戯言遣いのお兄ちゃん

名前紫木一姫^{ゆかりきいちひめ}

性別女

澄百合学園生徒。曲絃師。《危険信号》（シグナル・イエロー）、
《戯言遣いの弟子》

前頭葉の言語野に後天的な障害があり、そのためことわざや慣用句、
熟語などを

間違つて使用することがある。頭が悪く、全教科赤点。手先は器用。
剣玉が得意。

5年前からあまり外見が変わっていない。
「姫ちゃん」という愛称を好む。

ぼくの呼び名は師匠

名前零崎人識^{ぜろさきひとしき}

性別男

《零崎一賊》の鬼子。一賊同士の間で生まれた血統書付きの《零崎一賊》。

その出自故に、一賊内では一種の禁忌と見なされており
零崎双識以外に積極的に関わろうとする者は少ない。「いーちゃん」
の対極の存在。

『零崎曲識の人間人間』の時に高校受験云々と言っているので、本
編登場時の年齢は、
いーちゃんと同じ19歳か20歳。特に二つ名はなかったが「いー
ちゃん」によって

《人間失格》と呼ばれる事になる。放浪癖あり。

尖ったものが好き。背の高い女が好き。好みのタイプは殺さない。
甘党。自称犬好き。

歌うのは嫌い。本質的に器用で一通りの事はそつなくこなす事がで
きる。衣服の改造
(ナイフを仕込む)や武器の自作なども自分で行っている。

服、靴、所有しているナイフの柄と、いたるところに鏡の向こう側
であるいーちゃんの

トレードマーク、
(二重丸)が施されている。因みに、自身の
トレードマークは

顔面に施された刺青の模様。無理をすれば能瀬慶子に見えないこと
もない。

時折人間らしい言動を見せたりも。いーちゃんとの掛け合いは秀逸。
西東天に「汀目俊希」と呼ばれたが、結局「零崎人識」で通す事に

決めたらしい。

「汀目俊希」は中学のときに名乗っていた名前、と言っているので本名が

「零崎人識」かもしれない。親も零崎だし。

刃物連盟に加盟している

ぼくの呼び名は欠陥製品

名前不知火袴しらぬいはかま

性別男

箱庭学園理事長、そしてフラスコ計画の黒幕である

服は和服を着ており、顔についてはおじいさん

性格はぶつちやけ最悪であり、自らの理念の為なら学園の生徒全てを犠牲にすることも厭わないほどである。

第10箱 フラスコ計画（前書き）

遅れてしまい申し訳ありません。今月と来月は投稿が難しくなります。

あまりこういう事を書くとなんな事も自分で決められないのかと言われそうですが

アンケートの協力お願いします。アンケートの内容は第8箱にあります。

感想の返信をしているんですが此処で返した方がいいんですかね？
それではどうぞ

第10箱 フラスコ計画

「此処が箱庭学園か…広いな…」

あれからぼくは、箱庭学園に足を運んでいた。

「おい。お前ちょっと待て」

声のする方へと振り返ってみるが、姿は見えない。

「此処だ。此処」

「うわっ」

我ながら情けない声を出してしまった。

そこに居たのはセンチでなくメートルで表現すべき人間がいた。

「おいお前。なんで此処に来た？」

「不知火理事長に話があつてね」

「待てお前を学園に入れる訳にはいかない此処で消えてもらっ」

「理由を聞いてもいいかな？」

「お前はこの学園の人間を傷つけるからだ」

「いきなりだね。」

「お前は友達を平気で殺すだろ」

「ひどいなーでもまあ、ぼくは殺すかもしれない人を友達とは言わないよ」

「やっぱりお前は危険だ。此処で消えてもらっ」

「正義の味方のつもりかい？」

「元英雄」

そういうと彼はいつの間にか消えていて、気づいた時に飛ばされていた。

ドガッ ガッア

容赦なく壁に叩きつけられた。尋常じゃない痛みがぼくを襲う。今にも意識が飛びそうだ。哀川さんの蹴りより痛いんじゃないだろうか？

いや、哀川さんの次くらいかな？

壁に叩きつけられたせいで口の中を切ったようだ。口に血の味が広がる

どうやら肋骨も何本か折れているようだ。本当に死ぬじゃないかな
ぼく

「どうしたもう終わりか？」

「終わりの何もあんな攻撃まともに受けて動けるはずないだろう？」
まったくなんで人と会っただけなのに、どうしてそれがこんな挙句になるんだ？

「やめてください日之影前会長」

「黒神止めるなこいつは……」

助かったのか……と言ってもボロボロだけど

「おい貴様大丈夫か？」

「ありがとう助かったよ」

「保険室に連れて行った方がいいな少し待っている」

それからしばらくして、保険委員がやって来てぼくは運ばれていった。

「どうしてあのような事を？」

「あいつは今までで一度も見たことのない奴だった。どうしてもこの学園に

入れてはいけないと思ったんだ」

「私が見る限り普通に見えましたが？」

「いやあいつはそういうレベルの人間じゃない気がする」

保険室に運ばれて治療を受けたばくは、来た時と変わりないほどに回復していた。
でも学校の保険室にしては、機材が揃いすぎている。此処も普通ではない

「さてとそろそろ理事長室に行かないと、此処だ、」

「失礼します」

「どうぞ」

「それでこちらに来たということはフラスコ計画に協力していただける

ということでしょうか？」

「はい」

「それではこのサイコロを振って頂けますか？」

「これは？」

「まあちよつとした確認ですよ」

振ってみると出た目はバラバラだった。

「普通ですねもう一回振ってください」

振ってみるとまた出た目はバラバラだった。

「ありがとうございますもう結構です」

彼は異常ではないようですね

「それでぼくは何を手伝えればいいんでしょう？」

「はいあなたにはフラスコ計画の補佐をしていただきます」

「分かりました。それでお願いがあるんですが？」

「何でしょう？」

「空き教室を使わせていただきたいんですが」

「分かりました。それくらいの事でしたら」

「基本的には、用がある時にはお呼びしませんので」

「それでは失礼します」

「みなさんはどう思いましたか？」

「殺しやすそうな人間だね」

「ずいぶんと弱そうな人間だな古賀ちゃんはどう思う？」

「……………」

「どうしたんだ古賀ちゃん？」

「なんでもないよ名瀬ちゃん」

「ふん俺が一人いればフラスコ計画は完成する」

「あの人の心を読んでみたけど、なんだか変な感じなんだよね不完

全というか」

「そうですね、そうですね」

十三組の十三人補佐井伊友野完全な不完全

第10箱 フラスコ計画（後書き）

今回人物紹介を期待した方すいません。いるのかな？
化物語とめだかボックスのクロスオーバーはもう少しお待ちください。

質問、感想、要望などありましたら作者まで

番外編 ザレゴトゾンビ（前書き）

みなさんどうもお久しぶりです。と言っても他の小説書いてたんですけどね。

本編を期待した方申し訳ありません。本当はお盆にやるネタだったものです。

黒歴史になる可能性大

それではどうぞ

番外編 ザレゴトソソビ

001

「久しぶりだね姫ちゃん。ぼくはまだ君が死んだ事を受け入れられないみたいだよ」

今日はお盆という事もあり周りに人がいたけれど、そんな事を気にせずに僕は話す

「君はあの時何を伝えたかったんだい？ぼくといって本当によかったの？」

答えなど返ってくるはずもなくその場に立ち尽くす

「君の死がなかった事になればよかったのにね。また来るよ」

この時から運命がまた狂い始めたのかもしれない。うまくいかないのなんて何時も通りだったのに、この時だけは防げたかもしれないのに、分かっていたはずなのに、僕は願ってしまった。

今思えばこの時ぼくが望まなければ、怪異に出会う事もなかったのに、また彼女を彼を殺さなくて済んだはずなのに、

「なんだいの字またあそこに行ってたのか」

「ええまあ」

「辛いのは分かるがもうやめた方が良いあいつだってきつと……いやなんでもない」

「分かってますよ。分かってます。」

ぼくだって分かっているんだ。けどそれを認めてしまったら忘れてしまうような気がする

して、ぼくの中からいなくなるような気がして

「今日はもう寝ますおやすみなさいみいこさん」

「おやすみ」

いつも通りの朝だった。

何も変わらず、ぼくだけは変わらず

そんな朝だった。

「あつおはようございます。みいこさん」

この時までは何時も通りの朝だったんだ。

「おや？誰だ君は？新入りか？」

みいこさんは、まるで今初めて会ったような口ぶりで言う。

「何を言ってるんですみいこさん？ぼくですよ。ぼく」

「いや、すまないが本当に分からないのだ。何処かで会った事があったか？」

それを聞いてぼくは、走りだしていた。

「あつおい、君行ってしまったか…それにしても誰だったんだ？あれは？」

嘘だ。みいこさんに限ってぼくを忘れるなんて、きつと気のせいだ。あいつなら友ならきつとぼくの事が分かるはずだ。そう思いぼくは友のいるマンションに向かっていた。

よしこの角を曲がればもうすぐだ。

ドンッ

「痛っ」

「大丈夫ですか？ すいません。急いでいたものですから」

「いやこちらこそすいません、僕は大丈夫です」

「本当にすいません」

「大丈夫か？ 我が主様」

「僕は大丈夫だよ忍」

「それよりも今の人間から怪異の匂いがした」

「どう見ても普通の人だったぞ、今の人本当か？」

「怪異なんてものは何処にでもいるそうじゃろう？」

「いやたしかにそうだけど…せつかく京都にお前が行きたいって言うからきたのに」

「諦める怪異に会った人間の1運命^{さだめ}じゃ」

「しょうがない追いかけるか」

「早くしろ見失うぞ」

「おい友ぼくだ」

「誰？ 私にあなたのような知り合いはいません。帰ってください。」

「おい友ちよつと待つ…」

ガチャ パタン

嘘だろ？誰もぼくの事を覚えてないなんて、最初から居なかった人間みたいじゃないか

その日僕は一人になった。

003

もう今日は帰ろう。帰る？何処へ？もうぼくの居場所はなくなったんだ。

ああ、もう本当に戯言だ。

ぼくは、気づくとまたこの場所に来ていた。

「ぼくは、一人になっちゃったよ笑えるよね」

ぼくは呟く

「一人になる事には慣れてたはずなのにさ、どうすれば良いと思う？」

帰ってくるはずのない答えを聞く。

死人に口なし

その通りである

「じゃあ死んでみますか？師匠？」

不意にそんな声が聞こえた。振り返って見ると其処には死んだはずの彼女

紫木一姫が其処に立っていた。

「何で姬ちゃんが？死んだはずじゃ……」

「ええ死にました。気づいたら此処にいたんです。」

「いや、でも……」

「師匠、死んでください」

そういうと彼女は僕に向かってナイフを投げてきた
ばくは向かってきたナイフを辛うじて避ける

服が切られ少し血が出る。肌に伝わる確かな痛み

逃げないと

ぼくは、死んだはずの彼女がいる事よりも此処から逃げる事で頭が
いっぱいだった。

でもどうやって逃げる？ジグザグ最後の弟子の彼女は、殺し名と同
じくらいの腕だ。

それをどうやって、一般人より少し動けるだけのぼくが逃げれるっ
ていうんだ？

考える考える考える考える考える考える考える

こんな時だって何時もどうにかしてきたんだ。
よし、チャンスは一度だ

「どうしたんですか師匠？死ぬ覚悟でもできたんですか？」

「どうだろうね？」

「まあどつちでもいいです。此処で死ぬんですから」

彼女はぼくに向かってナイフを突きつける

今だ

ぼくは地面の砂を彼女に向かって投げつける。
目潰し。それがぼくの今できるすべてだった。

「目潰しですか、相変わらず卑怯ですね。」

なんとも言う方がいいさ、生きるためにこっちだって必死なんだ。

逃げる。兎に角逃げる。人の居る場所に

「あの人は何処に行つたんだ？」

「分らんお主がもたもたしとるからじゃ」

「ええつ僕のせいだよ」

「主様」

「なんだよお前だつて悪いんだからな」

「そうではないあれを見る」

彼女の指指す方向には、さっきの人が、それに何かから逃げている
みたいだった。

「今度こそ見逃すなよ」

「分かつておる」

まさかこんな時にぼくの欠点が仇となるなんて
人の居る所に逃げようと思つていたのに、気づくと周りに人が居な
い場所に来ていた。

ちなみに居る場所は遷標の双子と戦つた、あの場所である。

「此処まで来れば大丈夫だろ」

「あれ？いー兄？」

万事休す、萌太君がいた。

「お久しぶりです。いー兄」

「やあ久しぶりだね。萌太君」

どうやって逃げようかと考えていたら彼女まで来た

「あれ？どうもお久しぶりです萌太くん」

「やあ姫ちゃん」

なんだかここだけ聴くと仲の良い兄弟みたいだ。
ぼく殺されそうだけど

「「さてそれじゃ死んでください」」

ここまでか…そんな事を考えていると

「元気いいねえ、何か良いことでもあったのかい？」

アロハシャツを着たおっさん。阿良々木君曰く怪異の専門家忍野メメ

これがぼくと忍野メメさんとのファーストコンタクトだった。

「やぁお嬢ちゃん。こんな時間に何をやっているだい？」

「何ですか貴方邪魔しないでください」

「いやいや邪魔するつもりはないんだけど、君ら人間じゃないだろ？」

「だったら何です？」

「怪異の専門家としては見逃せないかなあ」

「それでも殺します」

「無理だと思うよほら」

そう言つて指を指した先には、さっきぶつかった人が。

「おい忍此処で合ってるのか？」

「そのはずじゃ」

一人で話をしている人の姿が其処にはあつた。
もしかして痛い人なのだろうか？

「あれ忍野？何で此処に？それにさっきの人も」

どうやらこの人と知り合いらしい。

ほくだけ蚊帳の外みたいだ。

「阿良々木君悪いけど一人相手してもらつていいかな？二人相手だと辛くてね」

「分かった」

side 阿良々木

忍を頼りにここまで来た。

「おい忍此処で合ってるのか？」

「そのはずじゃ」

其処には、忍野とさっきの人が

なんで忍野が此処に？居なくなっただんじやないのかよ！？

僕がそんな事を考えてたら

忍野がこんな事を言ってきた。

「阿良々木君悪いけど、一人相手してもらっていいかな？二人相手だと辛くてね」

おい、三人の攻撃を受け止めた奴が何を言ってるやがる。

「いやだが主様。いくら忍野でも、もしもがあるじゃろ？」

「いや、でもよお」

「命の恩人じゃろが」

「元凶が何を言ってるやがる」

「分かったよ」

「忍行けるか？」

「任せろ」

「何ですか貴方？」

「吸血鬼じゃ」

「そんな物いる訳ないじゃないですか」

「ふん。怪異のお主には言われたくないのう」

「まあいいです。死んでください」

「その台詞お主にそっくりそのまま返すぞ」

そう言うのと二人は戦い始めた。

「以外に早いのう」

「ちっ何なんですか？貴方」

「だから吸血鬼だと言っとうろつが」

うわぁ全盛期にほど遠いとは言え、忍と互角に戦ってるよあの子本当何者だ？

とはいえ

吸血鬼に人間が勝てる訳もなく、最初の頃みたいな動きは出来なくなっただのか

その後は一方的な戦いとなった。

本当に同情するレベルで、何であの春休みに僕なんかが勝てたんだ

ろうつて思う

くらい

「どうした小娘もう終わるか？」

「一旦引きます」

「やあお疲れ様。そっちも終わったみたいだね」

「もう終わりか…あつけないのう」

「忍お疲れ」

「この程度では疲れんわ」

あれだけ戦ったのに？ どんだけ強いんだよ！！ 人外じゃねーの？
あつ吸血鬼か、いや、そんな事よりさっきの人無事か？

side 阿良々木 end

「大丈夫かい？」

「はい。ありがとうございます」

「あの一つ聞いてもいいですか？」
「ん？何かな？」

「今のは何ですか？」

「怪異だよ」

「怪異？」

「そう怪異。其処にあつて無いもの」

「なんだか酷く曖昧だな。ぼくと同じか…」

「僕の名前は忍野メメ怪異の専門家」

「忍野さん…ですか」

「ははっ忍野でいいよ」

「おーい無事か？」

「おっと阿良々木君も来たみたいだね詳しい話は後でね」
「はあ」

場所は変わってあれからぼく達はファミレス来ていた。

「おい忍野どういう事だよ？何で此処に居るんだよ？」

「元氣いいねえ、何か良いことでもあったのかい？」

「真面目に話せよ」

「冗談だって観光だよ。それより大事な事があるだろう？」

「その前に自己紹介でもしようかな」

「改めまして忍野メメです」

「阿良々木暦です」

「えっとうという者です」

そう言って名刺を渡す

「請負人？何ですかこれ」

「まあ何でも屋みたいな者かな？」

「さて、自己紹介も終わった所でこれからどうするかな？」

「どうするって助けるんじゃないのかよ」

「それは彼が決める事だよ」

「さっきの怪異の説明をした方がいいかな？一つ聞くけどさっきの子達は死んでる？」

「はい。死にました」

ぼくの目の前で、誰一人救えず

「死んでるって、じゃあさっきのは幽霊とでも言うのかよ？」

「落ち着きなよ阿良々木君。怪異だって」

「悪い」

「そっか。やっぱりそうなんだね。黄泉帰りで間違いないかな」

「「黄泉帰り？」」

「そう、黄泉帰り。死んだ人間が現世に帰ってくる怪異だよ」

「死んだ人間が帰ってくる？別に問題ないだろ？」

「いや大有りだよ。この怪異の特徴は、二つあるんだ」

「一つ目は、会った人間は忘れられる。居なかった人間になる。どう？」

「合ってます」

「二つ目は会った人間を殺そうとする。そのうち周りにも被害は及ぶけどね」

「でも会おうと思って会える怪異じゃないんだよ。そっちの事情に踏み入るつもりは

ないけど、願わない限り会える怪異じゃないんだ。君は被害者じゃないくてむしろ、

加害者なんだ。」

へえなるほどね。勝手に巻き込んで、メチャクチャにして、ぼくに

ぴったりじゃないか

「どうする？助かる方法しか教えないけどそれでもいい？」

「はい。お願いします」

「と言っても忍ちゃんにしか出来ないけどね」

「ちょ忍野あれだけ言っておいてそれは無いんじゃないのか？」

「嫌だな阿良々木君。いくら僕でもできる事と出来ない事があるんだよ？」

「まあでもしょうがないか忍出てきてくれるか？」

「しょうがないのう」

曆君がそう言うのと曆君の影から金髪の女の子が出てきた。

「えっとこの子は？」

「忍野忍、吸血鬼」

まさかの一言だった。

吸血鬼？あの？

「へえーそうなんだ」

「あれ？あんまり驚かないんですね」

「うんまあ慣れてるからねこういうの」

「えっと忍野忍さん力を貸してください」

そう言って頭を下げる

「僕からも頼むよ忍」

「はあーしょうがない今回だけだ」

「ありがとう」

「さてと、話が纏まった所で今回の作戦だけど…」

006

忍野さんが言う作戦はとてもシンプルなものだった。

戦って動けなくする。その後は忍ちゃんがどうにかしてくれるらしい。

ぼくにできるのかな？忍野さんが言うにぼくの方には向こうから来てくれるらしいけど

ぼくは今昨日と同じ場所にいる。本当に来るのかな？

「師匠死ぬ覚悟はできましたか？」
「生きる覚悟もまだなんだけどね」

やっぱりぼくの相手は姫ちゃんか

side 阿良々木

「おい忍まだ見つけれないのか？」
「煩い黙っておれ気が散る……見つけたぞあの二人だ」

忍は前から歩いてくる二人組みに向かって指を指した。

一人は一見、背広を着た針金細工の人形のような印象。
異様に手足が長い。髪をオールバックにし、銀縁眼鏡をしていた。

もう一人折り目正しい燕尾服、胸ポケットにはハンカチーフをセツト。

軽くウエーブのかかった肩までの黒髪、端正な顔立ちと、どこから見ても音楽家のような姿をしている

「おい貴様ら止まれ」

「ん？君僕の妹にならないかい？」
「ん？何だい？」

今明らかに変な単語があつたぞ

「断る」

「そうか残念だな。で何のよう？」

「死んでもらう」

「それは困るなーどうしようかトキ？」

「僕に聞かないでくださいよレン」

「おい聞いているのか？」

「それでは零崎を始めよう」

「零崎を始めるのも、悪くない」

彼は忍に向かって鋏を切りつけた。

「忍！！」

「おっと君の相手は僕だ。少年」

早く行かないといけないってのに

「悪くない」

「そいつはどうも」

なんでさっきから攻撃が当たらないんだ？こっちは吸血鬼になつて
るのに、

あの女の子といいこの人達といい、実は吸血鬼ってすごく弱いんじゃないか？

「でもそろそろ終わりにしよう。動くな」

その一言で僕の体は動かなくなった。

本当にこの人達は人間か？吸血鬼の僕が言うのも変だけどさあ

「これで終わりだ」

そう言いながらこっちに近づいてくる
でもこんな所で負ける訳にはいかない

「負ける訳にはいかないんだよ！！」

僕はできる限りの力を込めて思いっきり殴る

「なっまだあれをくらって動けるのか？しまっ…」

ドガッ

吸血鬼の力で殴られたせいで爆音が響く
そこにいたのは忍と戦っていたはずの人だった。

「あはは、大丈夫？トキ」

「なっどうして僕を庇ったりしたんですか兄さん」

「そう呼ばれるのも久しぶりだな」

「おい大丈夫かあんた」

「ははっ家賊以外に心配してもらうなんてね」

「何で庇ったりしたんですかレン？」

「弟を死なせるなんてそんなものはもう存在としては兄とは呼べな

いのさ

そいつは最早人ではないし、そいつは最早鬼でもない」

「おい大丈夫か、あやつが急にいなくなったからな」

「ああ忍か僕は大丈夫でも…」

「うふふ死ぬ前にもう一度家賊に会いたかったな…死んでるんだっけ」

「トキ先に行くよ。そうだお嬢さん私の妹にならないかい？」

「断る」

「さて、お前さんはどうする？」

「いや、もういい殺してくれ」

「それでいいのか？」

「ああ、でも——せめて人間らしく、笑って死にたいものだな」

「安心しろ」

「だが、誰かに死を看取ってもらうのも悪くない」

こうして名前も知らない二人は居なくなった。

あの人は最後に言っていた。

家族に会いたかったと

もしかしたら僕達がもう少し遅ければ、家族に会えたのかもしれない
僕はその邪魔をしてしまったのかもしれない

「お前さんが責任を感じる必要はないあやつらはもう死んでいたのだから」

「なあ、もし大切な人が死んだらお前ならどうする？」

「どうする事もできん。その死を背負う事ぐらいしかな」

「そうか」

「安心しろお前が死ぬ時は傍にいてやる」

「ありがとな忍」

「早くしろまだまだ行く所はある」

「ああ」

side 阿良々木 end

007

「どうしたんですか？師匠？もう終わりですか？」

「いやーどうかな」

正直もうボロボロだった。動くのが精一杯なくらいできる事ならもう辞めたい。

彼女の攻撃を避けられなくなってきた。

ドンッ

思いっきり飛ばせられる

「おい少年どうしたんだ？って怪我してるじゃねーかおい」

ふと顔上げると人類最強の請負人が立っていた。

哀川さんあなたはいつでもそうなんですネ。

「哀川さん助けてください」

「上の名で呼ぶな下で呼べ。あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだって何であたしの名前

知ってんだ？」

哀川さんもぼくの事を覚えてないだろうがそんな事知った事か

「哀川さん。気づけなかったのは、ぼくが気づきたくなかったから忘れていたのは、ぼくが思い出したくなかったから」

「どうして墓に行ったか今なら分かる。僕は許してほしかった、死んだのは、ぼくの

せいだから、ぼくが頼りなかったから」

「何を？」

「逃げることを」

「その何がいけねーんだ？逃げればいいじゃねーか」

「そうですね。それが正しいのかもしれませんが」

「逃げればまたやり直せるかもしれない良い事があるかもしれない、でもダメなんです」

「何でだ？」

「死んだのが、死なせたのがぼくの家族だから!!」

「大切だったんです。失くしたくなかった」

「最後にした会話をもう思い出せない。消えてしまったんです」

「どうしてなぜ？」

「その理由が今日分かった」

「背を向ける事はできない。」

「お願いします哀川さん」

「過去に縛られず」

「生きたかった」

「助けてください」

「そうできたならどんなに――」

「でもできなかった」

そんな人生

ぼくにはできなかった

でももし人生にやり直しあるのなら

頑張らなきゃいけないのはきつとここだろ？意地をみせるよ。戯言
遣い！！

だからぼくは言う

「ぼくを助けてください」

もう死ぬことには―飽きたそろそろ、生きること、始めよう

「へえ気に入った。その願いこの人類最強の請負人哀川潤が請け負
った」

「師匠そろそろ死んでくれますか？」

「待てよお前の相手はあたしだ。楽しませてくれよ？」

ぼくが覚えてるのはここまで気づいたら哀川さんが

「あたしの仕事はここまでだ少年。後は自分でけじめつけな」

って

「やあ姫ちゃん久しぶり」

「あつ師匠久しぶりです」

そこにはぼくの知っている姫ちゃんがいて

「ねえ姫ちゃんあの時何を言おうとしてたの？」

「えっあの時の事ですか？えっとその…」

急に赤くなりだした。熱でもあるのかな？

「えっとその…言いますね」

「うん」

「あなたの事がずっと好きでした」

まさかの告白だった

「そう、えっとごめんこういう時どうしたらいいのか…」

「いいんです。それに私死んでますし、もう私いきますね」

これだけは言わないと

「姫ちゃん」

「はい？」

「さようならそしてありがとう」
「はい」

そう言うと彼女は消えていなくなった。

008

今回のオチというか後日談

あれから阿良々木君と忍野さんとも合流した。
哀川さんはいつの間にかいなくなっていた。

「ありがとうございます」

「君が勝手に一人で助かったただだよ」

「阿良々木君もありがとね」
「いえ」

「そつだこの名刺をあげるよ」
「これは？」

「連絡をしてくれれば無料で仕事をしてあげるよ。怪異以外ならだ
けど」

「そうですね」

「本当にありがとうございました」

「じゃまたいつかね」

「さよなら」

みんなと別れた後ぼくはあのアパートに戻ってきた。

「おい、いの字お前何処行つてたんだ？」

「お別れを言いに行つてきたんですよ。みいこさん」

「そうか、いい顔してるぞ今のお前」

「そうですか？」

「ああ」

「いの字」

「何です？」

「おかえりいの字」

「ただいまみいこさん」

怪異と出会ったのが、ぼくにとってプラスになったのかは分からない
でも一つだけ言える事がある。

ぼくは今日も生きている

だからぼくは今だからみんなに伝えたい

ありがとう

番外編 ザレゴトゾンビ（後書き）

どうだったでしょう？まあ原作と大きくかけ離れてますけどね。設定も矛盾してます

別の小説を優先させてください。すいません

アンケート結果ですが3番に決定しました。次回は零崎人識が出ますお楽しみに

質問、感想、要望などありましたら作者まで

番外編 零崎人識との出会い（前書き）

みなさんお久しぶりです。

やっと書けました。

あとがきに質問があります。

それではどうぞ

番外編 零崎人識との出会い

「夢はそう簡単に叶わないね」

「そりゃそうさ。こちらら現実になつて敵わねえんだからな」

「つまり希望はことごとく達成困難なものだつてことか」

「達成困難なものが希望であるとは、限らねーけどな」

これはぼくと零崎の一断片。

交わした会話のひとつ。

仮に、もし仮にだが、ぼくが戯言遣いでなかったとしたらぼくはどうなっていただろう？

たぶんいやぼくが戯言遣いでなかったとしても変わらなかっただろう。

結局のところ。ぼくはぼくのままだろう。いままでもそしてこれからも。

あの日初めて他人から見た自分を見た。

ぼくはそう思う。

零崎もそう思った。

ぼくと零崎との関係は感覚としてはそれに近い。

ぼくと零崎は同じであることを認識しながら、それが全く違う存在であることも理解していた。

「ぼくはひょっとしたら君のようになっていたのかもしれないな
だから親近感が持てるんだろう」

「俺はお前のように絶対なれなかったと思うぜだから好感が持てる」

これも会話の一部分

ぼくらは互いに自分のことが嫌いだったのだろう。
ぼくは傍観者で、零崎は殺人鬼だ。

友のマンションに行ってきた帰り、せっかくなのでみんなお土産を買って帰ろう。

「ありがとうございますー」

遅くなってしまった。早く帰ろう。

四条大橋を渡らずに、その横の階段に降り鴨川沿いの河原に出る。
なんで普通に帰らなかったんだらうか？

氷漬けにでもされたような感覚、ぼくはこの感覚正体を知っている。

『殺気』である。純粹な殺気

この時ぼくの頭にあったのは、友から聞いた京都を震撼させる殺人鬼の話だった。

「嘘だろ？おい」

仮にぼくの後方百メートル先にいるあいつが、噂の殺人鬼だったとしても

何かが不自然だ。前から誰かにつけられているような感覚はあったが
殺気に関してはこれが初めてだ。まるで品定めをするかのような

そんな事を考えている間も後ろのあいつは近づいて来ている。

足音が段々近づいているのが分かる。その足音もやがてなくなった。

つまり今ぼくの後ろにはあいつがいる。距離にして十メートルもないだろう。

殺せる距離にも関わらずそれをしないということは、顔を見てから殺すのだろうか？

ずいぶんと変わった奴である。もっとも殺人鬼である時点で変だが

自分を殺す相手を見ておこうと思い振り向く

身長は平均よりもやや低い。細身で手足の長い小柄な体格

タイガーストライプのハーフパンツにブーツ

赤い長袖のフード付きパーカー、その上にタクティカルベスト

両手にはフィンガーグローブ

サイドを刈った長髪を後ろで結んでいた。右耳に三連ピアス、左耳には携帯電話のストラップ

サングラスをかけていたため、表情は見えなかったが、右顔面のみ禍々しく施させた刺青が

彼の異様さを引き立てていた。

何から何までぼくと違う。

先に動いたのは相手だった。

右手をポケットに入れたと思ったら、次の瞬間にはナイフが目の前にあった。

しかしぼくは上半身を後ろに反らすことで、なんとかその攻撃をかわす

なんでそんな事ができたのかというと、知っていたからただそれだけである。

それにしてもこの殺気は昔どこかで会ったような気がする

どこで？それよりも今はこの状況をどうするかである。殺されそうになっているのに

随分と余裕なんだと思う。自分の事なのに

このまま殺される訳にもいかないので、ぼくは持っていた鞆を利用し、そのまま相手の顔面にぶつけようとする。

しかし相手は最初から分かっていたかのように、後ろにかわす。無理な体勢で攻撃したため、バランスが崩れる。相手はその隙を見逃さず、ぼくに足払いをしてきた。

受身をとればよかったが、そんな事がぼくにできる訳もなく、そのまま地面に倒れる。

相手はとどめと言わんばかりに、ぼくの心臓を狙ってきた。

普通なら反応できなかっただろう。しかし

この状況だってぼくは生まれる前から知っていた。

ナイフはぼくの服を刺し貫いたところで止まり、ぼくの人差し指と中指は

相手のサングラスを押し上げたところで止まった。

こちらは心臓を犠牲に眼球を瞬壊でき
あちらは眼球を生贄に心臓を滅殺可能。

肉を切らせて骨を絶つなんて現実では不可能

どちらが有利かなんて言うまでもない。

しかしそれゆえの膠着状態

この時は彼の気まぐれか、それとも神様の悪戯か

「――傑作だな」と。

相手はナイフを捨てた。「――戯言だろ」とぼくは指を引く。

相手がぼくの上から引くのを確認してから、ぼくは立ち上がる。
相手はずりおちたサングラスをかけなおした。

そしてしばらくして

「俺は零崎ってんだ」

零崎？ああ零崎か思い出した。

「零崎人識。でお前は誰よ？そっくりさん？」

それは。

自分の名前を相手に確認するかのような
違和感ある問いかけだった。

これがぼくと零崎の、傍観者と殺人鬼が出会った日の記憶

その日は奇しくも十三日の金曜日だった。

あれから一日後ぼくと零崎はカラオケ店に来ていた。

「なあ欠陥製品」

「なんだい人間失格」

「そういえばお前の名前ってなんだ？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「聞いてねーよ」

「じゃ改めまして、井伊友野です。いや、零崎には意外人物っていった方がいいかな？」

side 人識

こいつと出会ったのは必然だったのかもしれない。いや偶然か生きるために何時も通りに人を殺した。本当はもう一つ理由はあつ

ただけだな

最初にこいつを見た時、今までに会った事のない人間だと思った。少し気になったからつけてみる事にした。

つけられる事に気づいているのに逃げるところか、俺が来るのは待ってやがる。

あいつは俺が近くに来ると俺の方に顔むけた。

目の前に自分がいるんじゃないかと思った。死んだ魚のような目、本当に俺に似ていた。

しかし実際は殺人鬼なんかより、化け物だってことを俺は知る事になる。

そういえば名前を聞いてなかったな

「なあ欠陥製品」

「なんだい人間失格」

「そういえばお前の名前ってなんだ？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「聞いてねーよ」

「じゃ改めまして、井伊友野です。いや、零崎には壱外人物っていった方がいいかな？」

は？今こいつはなんて言った？壱外？おいおい、なんの冗談だ？壱外っていったらあの壱外しかねーよな？殺し名と呪い名を創った

あの？

兄貴達に絶対に近づくなんて言われてたのによ
どうすんだよ。こんな奴が壱外なんてな殺人鬼の俺が言えた事じゃ
ねーけど

side人識end

「あれ？どうしたんだ？零崎」

「何でもねーよ」

「なあ零崎人を殺す感覚ってどうなんだ？」

「はあ？何だよいきなり」

「いや、ただ気になって」

「別になんとも思わねーな」

「本当かよ」

「あーでも強いていうなら生きるためだな」

「生きるため？」

「そう。零崎人識にとって殺人は呼吸をする事と同じである」

ふうん。なるほどねぼくが嘘をつく事と同じって訳か

「まあ今のは嘘なんだけどな」

「嘘かよ」

「お前さあこの世の中で一番大事な物ってなんだと思う？」

「そうだな……金とか」

「その通り。何をするのにも金があるこのカラオケにだって金が掛かる」

「で、結局どういう事だよ？」

「あーそうだな……」

零崎はボックス内の電話を取りラーメンを二つ頼んだ。
しばらくしてからラーメンが運ばれてきた。

「食べよおごっちゃる」

どうやらぼくの分もあつたらしい

「でもそれも人の金だろ？」

「まあな、金は使った方がいいに決まってるんだろ？」

それは少なくともお前が言う資格はないと思う

「で？どうすんのよ？」

「まあ貰うけど」

「で、さっきの話の続きだけどよ、俺には殺人をしているっていう自覚はねえ」

「ひどい奴だな」

「最後まで聞けって、殺人行為を殺人しているみたいなのよく分からないな。もう少し現実論で話せないのか？」

「しょうがねーだろ。現実論で言えば俺は人を殺しました。で終わ

りなんだから」

「それもそうだな」

「そろそろ出ようぜ」

「どこか行く所でもあるのか？」

「いいから早くこいって」

「おい」

そのまま零崎に強引に連れ出された。

カラオケボックスの中には、食べかけのラーメンが残されたままだった。

「で、どこに行くんだ？」

「なあお前兄弟いるか？」

聞いちゃいねー

「俺には兄と妹がいて……」

そこまで言って零崎は急に止まった。

零崎の目線の先には警察官に取り押さえされた男の姿が

「君早くこっちに来なさい」

「私はただ、妹にならないか聞いたただけだ」

「訳の分からない事を言っただけでこっちに来なさい」

男の人がこっちに気づいた。

「おーい人識君頼む説明してくれないか？」

「おい零崎呼ばれてるぞ」

警察官がこっちにやって来た

「すみませんご家族の方ですか？」

「いえ、人違いです」

あつさりと見捨てる零崎、心なしか男の人も泣いている気がする。
今度は零崎の隣にいるばくに気づく

「おや？もしかして君は人識君友達かい？仲良くしてあげてね」
「はあ」

「いいから早く来るんだ」
「じゃ人識君またねー」

そついうと男の人はパトカーに乘せられていってしまった。

「なあ零崎もしかしてさっきのって」
「言っな」

「ところでこんな事してていいのか？」

「ん？何が？」

「いや、ほら君は殺人鬼だろ失敗した事とかないの？」

「ない。いやお前を殺し損ねたか」

そういえば昨日まで殺し合いをしていたんだった僕達

「そうだな逃げる事も考えなきゃな」

「今気づいたのかよ」

「記念になんかお願いを一つ聞いてやるよ」

「お願いって？」

「例えば俺に誰か殺してほしいとか」

「そうだな……君持つてるナイフをくれよ一番高いの」
「いいぜ百五十万払えるなら」

「あーそういえば現金無かったんだった。小切手でもいい？」

「おい」

「ん？何？」

「さっきお前金が無いから払ってくれって言ったよな」

「うん。言っただね」

「じゃなんで小切手なんか持ってたんだ？」

「いや今日は現金を持ってきただけだよ」

「じゃああれか？最初から俺に払わせる気だったのか？」

「そうだけど？」

「騙したな」

「おいおい零崎、ぼくは嘘つきだぜ？」
「殺してえ」

零崎はさらっと物騒なことを言い出す

「まあいいほらよ」

「ありがと」

「じゃそろそろ行くぜ」

「死ぬなよ殺人鬼」

「黙って見てる傍観者」

「じゃ、息災で。人間失格」

「ああ。精々頑張れ、欠陥製品」

「ばいばい、セリヌンティウス」

「走れ、メロス」

番外編 零崎人識との出会い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

次回から本編に入る訳ですがその前に皆様に質問があります。

一つ目は改行の量です。多くした方が良いか、減らした方が良いか、そのままか

二つ目は漫画の振り仮名にある … この表現。必要か、必要でないか

質問、感想、要望などありましたら作者まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101u/>

ザレゴトボックス 戯言遣いと天才少女

2011年10月8日10時41分発行